資料４

内閣府男女共同参画会議　監視専門調査会　　2012年10月5日
「防災・復興における男女共同参画の推進」

NPO法人日本フェミニストカウンセリング学会
日本フェミニストカウンセラー協会　理事
竹之下雅代

１．震災当夜の電話相談

「2011年2月8日～3月27日　内閣府配偶者暴力等被害者支援緊急対策事業
パープルダイヤル～性暴力・ＤＶ相談電話」の存在

２．相談から見えたこと

・災害弱者の存在と、強調される「家族の絆」にそうことのできない人の存在
・これまでも困難を抱えていたが何とか過ごしていた問題が、震災を機に大きく浮上
　・・・耐えきれない性別役割分業の負担
・「大したことはない」と話す背景にある現実

３．できたこと、できなかったこと

○面接相談に関して

・精神科、カウンセリング、相談への敷居の高さがある
・男性中心的な共同体意識のなかで個人の悩みが矮小化される
・顔がさす（人の目についてしまう）

○現地支援者との関係

・自らも被災しながら聴く側にいる方たちからの被災体験の語り
　共感疲労、二次受傷の状態。熱意で走ってきた方たちのサポート
　電話口で、ぶつけどころのない怒りのはけ口にならざるを得ないことも
・地元情報のない私たちへのサポート、チームプレイ
・ジェンダーの視点をふまえた相談のための研修、スーパービジョン

４．課題

～「ＤＶ・性暴力被害者の心理的回復」のプロセスに立ち会ってきた者として

○ＤＶ・性暴力に関する認識の変革は喫緊の課題

・「精神的暴力はＤＶではない」「あなたにも問題が…」

○語りつくす経験とそれに付き合う人の存在が必要・・・相談の継続

・トラウマ体験は簡単には「終わったこと」にはならない
・特に原発事故に関わる（子どもをもつ女性たちの）答えのないジレンマに寄り添う

特集

# 東日本大震災
# ～宮古市での被災女性支援を体験して

井上　摩耶子

## ■ はじめに

2011 年 3 月 11 日、私は大分に出張していた。帰りの新幹線が大幅に遅れ、大阪止まりになり、京都まで行かないということで特急料金が払い戻された。「東北地方での地震による遅れ」とのアナウンスはあったが、帰るまでなにも知らなかった。

それから TV の報道、とりわけ津波の映像に釘付けになった。しかし、避難所などでの被災者の話を聞くにつれて、なにも力になることのできない無力感と罪悪感にかられるようになった。自分がカウンセラーを生業としているがゆえに、なにか被災者に責められているような気さえして、自責感にとらわれ、鬱々としてきた。4 月になって、ボランティアの被災地支援が活発になってきた。しかし、私はまだフェミニストカウンセラーとして、なにができるのかはっきり掴めていなかった。

まずなすべきことは、災害支援の経験のない自分の力を補うために本を読むことだと思った。なかでも、オーストラリアの精神科医ビヴァリー・ラファエル著、石丸正訳『災害の襲うとき――カタストロフィの精神医学』（みすず書房、1989 年）には、感銘を受けた。ハーマンの著作への共感と同質の読後感をもった。もう 26 年前に書かれた本であるが、災害による「心的外傷後ストレス障害」（PTSD）についての解説も詳しい。

なるほどと思ったのは、不意打ちの衝撃をもって襲う災害によって引き起こされる PTSD 症状は、「ショックの影響がとくに重大で、自我に防衛のいとまを与えないためだ」（p.133）と説明されていたことである。そして、こう考えてくるなら、「以前に精神的に負傷している者は当然ながら障害を生じやすいはずだ」と説明される。私のまわりでも、TV で被災地の状況を見るだけで、DV 被害者や性暴力被害者の方たちが深く傷ついておられた。

ラファエルは、「幼児や成人後の順応不全、精神医学上の障害の既往症、心身相関的な過敏反応、性格異常などいくつかの個人的な背景の差異が、心的負傷後（心的外傷後の意）の障害発生の危険性と関連づけられ、さらに女性にこの危険性がより強いことも明らかにされた」（p.133）としている。

日本でもアメリカでも、成人の精神科受診率は、女性が男性の 2 倍といわれている。ということは、当然、東日本大震災による「こころの傷」も、女性のほうが深くなるということになる。この点に注目して、フェミニストカウンセラーとしては、被災女性への「こころのケア」に、ジェンダーの視点を導入する必要性があると声を大にして主張しなければならないなと思った。

## ■ 阪神淡路大震災：「こころのケア」来談者統計

そういえば、兵庫県の「こころのケアセンター」による来談者統計にも同じ傾向がみられた。1995 年 6 月～97 年 3 月末までの 22 カ月の報告によれば、1956 例中の約 7 割が女性で、平均年齢は 46.7 歳。症状のジェンダー差としては、男性では、アルコール関連問題が 16.9%で、女性の 14 倍。女性では、不安・対人関係・睡眠障害が男性に比して高くなっており、男性はこの 3 症状をアルコール関連問題として表出しているようにみえる（p.10～13、岩井圭司著、「被災地のその後――阪神・淡路大震災の 33 カ月」、『災害とトラウマ』、みすず書房、1999 年所収）。しかし、ここには、なぜ女性のほうが傷つきや

すいのかというジェンダー分析はない。

おそらく男性中心社会において女の位置を生きることは、男性よりも自己尊重感や、自己主張力を奪われることであり、ラファエルのいうように「自我の防衛力」を獲得し損なうからであろう。また、単に「個の自立」だけを目指すように社会化される男性と違って、「他者との関係性のなかでの自立」（井上摩耶子編『フェミニストカウンセリングの実践』、世界思想社、2010 年、p.6 参照）を社会化される女性は、災害による他者の死に遭遇する「接死体験」により強い衝撃を受けるのだろう。思いやりや共感といったコミュニケーション能力が男性より高い女性にとっては、「生き残り症候群」（生き残りの罪悪感）や「生き別れ症候群」と呼ばれる症状などが強く出るのではないか。この問題には、「パーソナル・イズ・ポリティカル」視点による分析が必要とされる。

何冊もの災害関連の本を読みあさり、なんとなく落ち着きを取り戻した私は、そろそろ支援に向けての第一歩を踏み出したいと思うようになった。

## ■ 岩手県宮古市での被災女性相談

6 月 28 日、仙台で内閣府男女共同参画局による「東日本大震災復興に向けてのシンポジウム　in 宮城～今こそ女性のパワーを発揮しよう！～」に参加し、そこで、もりおか女性センター長の田端八重子さんに出会った。彼女はフェミニストカウンセリング学会の仲間である。早速、7 月 25 日に岩手県沿岸部の被災地を案内してもらい、すでに現地で支援活動を始めておられる保健師、助産師さんたちに「ジェンダーの視点に立つ被災地女性支援」について話すことを約束した。

そして、8 月 17 日、18 日には、2 人の助産師によって実施されていた「東日本大震災・女性の心身の健康相談室」（宮古市）に合流。この事業は、内閣府、岩手県、もりおか女性センターなどとの共催事業である。相談室は、マリーンコープ「ドラ」（生協の店舗）の一角にある。17 日の朝、相談室のブースに座るやいなや、「みやこ災害 FM」の 2 人の若い女性記者からインタビューを受け、「相談室」の存在をアピール。午後 1 時、災害 FM を聞いたと、宮古市男女共生推進センターの女性相談員が来訪。すべり出しは上上である。

しかし、ここからは「待つ」ことがはじまった。誰も相談に来てくれないのだ。3 年前に大阪から宮古に来たというその女性相談員から、「大阪に比べると、ここにはまだまだジェンダーの視点がない。DV についての社会的意識も低い。仕事を失った男性が酒を飲みパチンコばかりしていると嘆く女性が増えてきた」、また「宮古の人たちには、カウンセリングという手法に馴染みがなく、おそらく精神科に行くような敷居の高さがある。そして、精神科医もほとんどいない」との情報提供を得た。

もし、カウンセリングに来られる人が少ないのなら、私たちにできることは次の 2 点――現地で相談活動をしている方たちの「共感疲労」や「燃え尽き症候群」を防止するためのサポートやスーパーヴィジョンをすることと、宮古にジェンダーあるいは男女共同参画の視点を普及させることにあるだろうと考え、男女共生センターの男女共同参画推進員のみなさんへの研修講師を申し入れた。

こうして、フェミニストカウンセリング学会では、2011 年 9 月～2012 年 3 月まで、岩手県盛岡の「復興支援センター」と宮古の「ドラ相談室」に会員を送ることとなった。

再び、9 月 26 日～10 月 1 日まで再び宮古に赴き、相方の助産師さんからお話を伺った。おひとりは津波で家を失い、仮設住宅暮らしをされていた。「仮設に、お嬢さんを津波で失った人がいるんだけれども、嘆かれることはない。『私、大丈夫よ。元気、元気』と笑っておられるだけ」と、ここでまた我慢強い東北の女性についての話になった。

## ■「トーキング・スルー」ということ

ラファエルのいう「トーキング・スルー」とは、多分、「一部始終を徹底的に他者に物語る」というこ

とだろう。彼女は、災害後、「トーキング・スルーすることが適応に役立つところきわめて多大である。それは当人にとって、自分の恐怖、無力感、罪責感、怒りが異例なものではないことがすぐ明らかになるからである。当人とその家族や他者との支援効果のある相互交流作用、とりわけ災害体験による感情、意識、解釈の共有を強めることも大切である」（p.404）と述べている。

しかし、この「堰を切ったようにしゃべって、みんなと共感してスッとする」という文化は、日本のものではない。どちらかといえば不言実行をカッコイイとする日本文化（これはなにかサムライ（男）文化ですよね）に、「トーキング・スルー」は馴染まない。この感覚は、日本人にはまだまだ濃厚にあるのではないだろうか？　実は、カウンセリングを学び始めた頃の私の思いも、まったくその通りだった。思春期葛藤から抜け切れず、自分の心理的回復を切望していたにもかかわらず、私は頭からカウンセリングを疑っていた。カウンセリングとは、カウンセラーから助言指導される過程にちがいないと勘違いしていたからだ。しかし、1 年もしない内に私は、カウンセリングとは、「自分が自分自身を他者に物語る」ことだと了解した。かれこれ 45、6 年も前の話である。

東北の女性たちは、カウンセリングについて、あの頃の私と同じような疑念を抱いておられるのかもしれない。もしそうなら、やっぱり「トーキング・スルー」の意味を身をもって知ってほしいと願う。ラファエルは、先の津波で娘を失った母親のような事例に対して、「生き残りグループも死に別れグループも、感情面での苦しみに圧倒されることなく、みずからの悲嘆や苦悩を感じ、そしてそれを表出することが必要なのである。死別の場合は、周囲の支えと励ましのなかで、悲しみ、怒り、思慕その他の感情をすべて表出する必要がある。泣くことに大きな解除効果があるのである。死別がもたらした新たな局面を次第に直視し、それを回顧・検証するにつれて、このような感情はますますつのってくるかもしれない。しかし支えになるような人間関係のなかで死別体験を語り、失われた絆を回想しながら、状況の克服に努力することで、カタルシスが得られるだろう」（p.195）と、「トーキング・スルー」の必要性とその効果を述べている。この点は、性暴力・DV・虐待被害者へのフェミニストカウンセラーによるトラウマ・カウンセリング過程と共通するものである。

## ■ シスターフッドの形成をめざして

フェミニストカウンセラーなら誰しも、この「トーキング・スルー」が CR（意識覚醒）グループのなかで体験されたなら、1 対 1 のカウンセリングにおいてよりも、被災者の方たちのエンパワメントは増大すると考えるだろう。当事者同士ならではの関係性が「トーキング・スルー」を容易にするからである。ラファエルも「災害がいかに苦痛に充ちたものであろうとも、その出会いは即人間同士の絆になる」（p.51）と述べ、さらに、「災害が残す遺産の 1 つは、根源的な家族の絆の再確認であり、これが家庭内の連帯と感情の深まりにつながる。」（p.149）と述べた。しかしながら、フェミニストカウンセラーとしては、ここのところが、ちょっと要注意なのである。

現在、東日本をはじめとして日本中で、「家族の絆」が声高らかに謳われているが、旧来の家父長制的性格をもつ家族の絆では困るのだ。どちらかといえば、東日本の女性たちには、CR グループでの「トーキング・スルー」を契機としたジェンダーの視点に立つ「シスターフッドの絆」をまず結んでほしい。それは、震災があったからこその遺産になるだろうし、その CR グループ活動を支援するのがフェミニストカウンセラーの役割である。日本全土での男女共同参画社会のひろがりをともに実現する希望を抱きながら…。

【転載】『ＷＣＫニュース』第 16 巻第 61 号より
ウィメンズカウンセリング京都　2012 年 1 月発行

**≪2012 年 10 月 5 日　監視専門調査会資料≫**